

「忘れないでほしい」

東日本大震災 ボランティア活動体験

私はアフガンボランティア部に所属しています。今年の夏休みに東北にボランティア活動に行くという話が出ていたのですが、なかなか話がうまく進まず、結局延期になってしまいました。ボランティア活動に興味があったので部活に入ったのですが、活動がないのでネットで調べ、NPO法人東京災害ボランティア「グリーン・グリーン」が行っている東日本大震災のボランティア活動に一人で参加しました。八月二十六日から四日間、場所は宮城県東松島市の奥松島の月浜海岸というところ

です。ここは松島の近くにある島で、松島とは橋でつながっていたのですが、震災でその橋が壊れてしまい、三週間全ての物資をヘリコプターで運んだことで注目された地域です。ニュースでも取りあげられたのでご存知の方もいらっしゃると思いますが、今回は月浜海岸で海開きをするということで、そのお手伝いをしました。

仕事は避難経路の確保や屋台、駐車場などの準備をしたのですが、道にコップやガラスの破片があって、まだまだ手が加えられていないということを感じました。そして、ボランティア生活の大変さを痛感しました。まず食事についてです。食事は自己責任で確保しなければならず、作業と作業の間の五分間で買いに行かなくてはならない時もありました。奥松島でお金を使い立ててもらおうと、私はなるべく現地の物を買いたかったのですが、なかなか短



瓦礫は整理されたが...

前にあり、ちょっとした公園のようなところもあって遊べる所はたくさんあるのに、子どもが一人も遊んでいなくて不自然でした。また仮設住宅が海の目の前にありましたが、生活感がなく、静かで居づらい雰囲気がありました。

現地の人の話では、被災者は自分の体験しかわからなかった。他の地区がどうだったかわからず、五月過ぎに電気が通ってテレビが見られるようになって、初めてこの震災が世界で注目されるほど大きな事件だったと知ったそうです。

たくさん出た瓦礫の処理をこの県が受け持つことが問題になっていますが、奥松島は瓦礫を自分の地域だけで処理できなかった。瓦礫があると、そこに建物を作ったり市場を作ったりすることはできないのです。瓦礫が整理されれば人々が生活できるように、建設のためのトラックや人が通ることができず、しかし奥松島は瓦礫が少なくないだけで、震災によって失った地域の機能を回復させ、以前の状態に戻そうという行動はしていませんでした。被災地という積み上げられた瓦礫のイメージでしたが、瓦礫が整理されたからと言って復興ができていくわけではなく、産業と結びつかないと復興はできないのです。そして奥松島は産業がないため、奥松島はさらに復興しづらいそうです。奥松島は海に囲まれた所ですが、右下の写真のように陸地に海水が入ってきてしまっているのでも、物が育ちません。私は海を利用して漁業を産業にできないかと思ったのですが、エイがいて危



住宅地だった所に海水が入っている

なかったり、魚が多くなかったりなどで、なかなか産業には活かせないとのことでした。また、地元の人たちの間には温度差があるように感じました。世界史の石出先生がいつも

おっしゃっている「黒板消しの裏と表」の話です。「黒板消しの裏と表」とは、物事は一方からのみ見られがちですが実は多面的であり、そのため一方からでなく多方面から物事を見る必要があるということです。私たちが表向きで接した人たちは、ボランティアを受け入れる体制の人たちでした。しかし、中にはよそ者に仕切られてはくれない、自分たちの生活を邪魔されたくないと思い、私たちが煙たがっている雰囲気の方々もいたように感じました。仮設住宅の人がたまに出てきていたのですが、目を合わせた

す機会が少ないのでしょう。そのような土地柄から私と奥松島の人との間に違いがあったのだと思います。復興まではまだまだこれからなのだと感じました。現地の人が「最初は写真を撮られることで、私たちが見せ物にされているようで嫌だった。けれど時間が経つにつれて、『大震災があったって多くの人が亡くなった』という事実を忘れられることは、もっと嫌だと考えるようになった」とおっしゃっているのを聞きました。東日本大震災が忘れられることのないように、日常生活に不自由がなく、今もあの震災で苦しんでいる人がいるということを知らない人々に、私が行って感じたことを伝えていきたいと思っています。今回学校新聞で発表する機会を得て、一歩進めた気がしました。

BBC、合唱部を取材

一〇月二八日放課後、合唱部が歌う「蛍の光」を、BBC (英国放送協会) テレビが取材した。

「蛍の光」がスコットランドの民謡「オールド・ラング・サイン」のメロディに日本語の歌詞をつけた楽曲であることは、ご存知の読者も多いだろう。今回は、そのように「オールド・ラング・サイン」が世界中で形を変えて親しまれていることを特集した番組の取材だ。

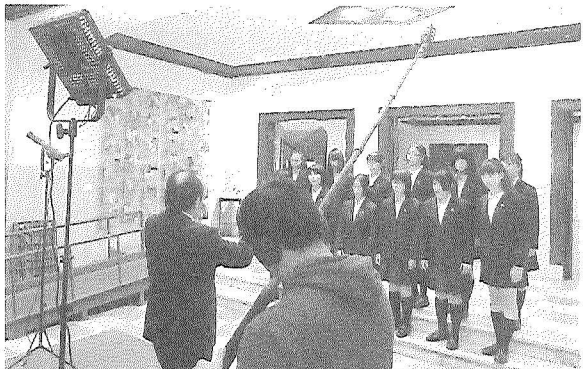
日本側担当者は、お茶高の合唱部のHPを見て、書かれている情報や共有しようとしている事柄から、誰かに伝えたい気持ちやモチベーションの高さを感じ、取材を申し込んだと言った。この日の午後、東京芸大の先生に日本で西洋音楽を定着するために「蛍の

光」が使われた経緯を取材し、翌日にはヨドバシカメラの開店時に「蛍の光」が流れているところを撮りに行く予定とのこと。

息をのむ撮影の緊張感の中、合唱部が「蛍の光」を歌った。ため息が出てしまうほどの美しさと迫力だった。スタッフからも「Beautiful」と声がかかった。もう一つの文化として成り立っていますね」と担当の方。当初は進行役のドギーさんも一緒に歌う予定だったが、部員二名のみの合唱となった。合唱経験豊かな十九浦美里先生にお聞きしたところ、お茶高の合唱部の個性は「少人数で一人一人がちゃんと歌っていて、独唱の練習もしている」とのことだと言った。合唱部の練習をドギーさんが部員に質問を

する。「あなたにとって『蛍の光』はどういう曲ですか?」「卒業式などで歌うので、とても思い出深い曲です」という返答に、BBCのスタッフ陣は満足したようにうなずく。取材後、合唱部員は口々に「楽しかった」とのこと。二年生は「世界の三億五千万人がこの放送を見ることができ、畏れ多い気持ちもあったが、長い歴史を持つこの歌を日本を代表して私たちが歌うことができ、本当に良い経験になった」と語る。

番組制作スタッフの真剣さと熱気も印象に残った。撮れた映像を確認しながら、「作戦会議です」と取材の方向をその場で考えていく現場を目の当たりにして面白かった。プロデューサーの女性、フリード・マックローンは、「少人数で一人一人がちゃんと歌っていて、独唱の練習もしている」とのことだと言った。合唱部の練習をドギーさんが部員に質問を



大学本館玄関ホールにて

「オールド・ラング・サイン」が世界中で形を変えて親しまれていることを特集した番組の取材だ。

日本側担当者は、お茶高の合唱部のHPを見て、書かれている情報や共有しようとしている事柄から、誰かに伝えたい気持ちやモチベーションの高さを感じ、取材を申し込んだと言った。この日の午後、東京芸大の先生に日本で西洋音楽を定着するために「蛍の

光」が使われた経緯を取材し、翌日にはヨドバシカメラの開店時に「蛍の光」が流れているところを撮りに行く予定とのこと。

息をのむ撮影の緊張感の中、合唱部が「蛍の光」を歌った。ため息が出てしまうほどの美しさと迫力だった。スタッフからも「Beautiful」と声がかかった。もう一つの文化として成り立っていますね」と担当の方。当初は進行役のドギーさんも一緒に歌う予定だったが、部員二名のみの合唱となった。合唱経験豊かな十九浦美里先生にお聞きしたところ、お茶高の合唱部の個性は「少人数で一人一人がちゃんと歌っていて、独唱の練習もしている」とのことだと言った。合唱部の練習をドギーさんが部員に質問を



茶 琴：清水さんのボランティア体験の記事は、とても考えさせられたわ。紅 緑：いつもより早い時期に発行したのだけれど、どうかしら?

茶 琴：BBCの取材みたいな非日常的なことがあると、紙面が充実するわね。茶 美子：ダンコンの記事も楽しんでね。今回は「茶 美子」はお休み。二面だけど精一杯作ったから、気軽に読んでくれると嬉しいわ。それでは、また来年お会いしましょう。